

デジタルコンテンツと 図書館



鶴 衛 学長

近年、インターネットの普及やコンピューターの小型化・高性能化、コンテンツのデジタル化技術など情報技術の進展で、図書館を取巻く状況は大きく変わっている。まさにデジタルコンテンツ時代における図書館はどうあるべきか、が問われている。

本学の附属図書館も、従来の機能や役割に加え、電子書籍や電子ジャーナル、電子新聞などのデジタルコンテンツを充実させている。ただ、ここで一つ気になる指摘がある。それは、この

ままデジタル化が進めば図書館は将来、必要なくなるのではないか、という懸念である。

基本的に、デジタルコンテンツは機器やネットワーク環境が整っていれば、いつでも、どこでも検索や閲覧が可能になる。そうであれば、自宅にしながら図書館の提供する情報を得ることができる。わざわざ図書館に行く必要はなくなる。しかし、結論を言えば、図書館がなくなってしまうことは決してない。むしろ、ますます図書館が重要になると、私は考えている。

なぜなら、図書館が果たす機能を考えれば明らかである。本学附属図書館は学生の自学自習を支援する「ラーニングcommons」としても力を入れてい

る。仲間と議論したり研究したりするのに、図書館を利用してもらいたい。図書館を、人間力を養うコミュニケーションの場としても位置付けているわけだ。

そして図書館の機能で何よりありがたいのは、スタッフのレファレンスサービスが受けられることである。若い世代には何の抵抗も感じないデジタル機器の操作も、“アナログ世代”の年配者にとってはハードルが高い。丁寧にアドバイスしてくれるスタッフがいればとても助かる。

デジタルコンテンツがいかに増えようとも何ら問題はない。要は、どのようにそれらを活用し、宝の持ち腐れにしないかである。

デジタルとポエジー

松川 弘 館長

いろいろなメディアが巷にあふれ、デジタルコンテンツが幅をきかせる今、じっくり腰を落ち着けて読書をする行為そのものが、ますます少なくなっているようです。それでも、本は相変わらず、読む者の想像力をかき立て、夢に誘う力を秘めています。読書は、私たちの重くよどんだ日常的な現実をいわば相対化する、そんな境地に私たちを導いてくれます。

ふだんはこっちの世界（日常的な現実）の枠の中にいる読者は、本を読むことで、いわばポエジーを介して、あっちの私、もうひとりの私に出会います。こっちの世界の埃にまみれながら、あっちの世界のポエジーによって

それを洗い清める、その繰り返しが困難に立ち向かう気力の維持を可能にするのです。

直接に会って教えを乞うことのできる人の数は限られますが、書物の世界での出会いは、ほとんど無限です。メル友の気楽さに似た出会いもあれば、遠い昔の人に自分の心の奥底をズバリと言い当てられビックリすることもあるでしょう。みなさんには、そうした出会いを図書館でたくさん体験して頂ければと思います。

読書を通して、読者は未知の世界に翻弄されますが、そのうち、よくも悪くも自分のことが少しずつわかってきます。生きていることの本当の意味が



とっさにわかったようで胸が打ち震える瞬間がやってくるかも知れません。そうした一瞬を体験するための旅のひとつの手段として読書があり、その機会をみなさんに提供するためにこそ図書館が存在するように思います。

本を読み進めていくこと、それは、みなさんがこの世界をより深く理解すること、自分がここにこのようにしてある、という事実をより深く納得することにつながるでしょう。